

記者の

目



五十嵐 朋子
岡山支局

「国際医療NGO」AMDA「30周年」

岡山市に拠点を置く国際医療NGO「AMDA(アムダ)」が今年8月、設立30年を迎えた。同市で開業していた内科医の菅波茂さん(67)が創設した団体は、年間約1億2000万円の活動資金をほぼ寄付だけで賄い、世界に広がる医師ネットワークを生かして災害地や紛争地でさまざまな活動をしている。スタッフや支援者はもちろん、多くの人が持つ「誰かの役に立ちたい」という気持ち。AMDAが地方に在りながら多くの協力者を得て世界の舞台で長年活動できた秘訣は、そうした「善意」に対する信頼感だと感じ

人脈地道に築き 柔軟に目的遂行

AMDAは、設立当初の「アジア医師連絡協議会」の英語表記の頭文字。2001年のNPO法人化を機に正式名称

「誰かのために」の連鎖力

れば支援の効率が上がる。イデオロギーは関係ない」と説明した。

同じ志の人を 心底信頼して

そして同じ目的を持つ人々を心底信頼する。東日本大震災の被災地に3年間滞在し、復興支援事業を統括した職員、大政朋子さんの心が好例だ。震災前、国際協力を研究する大学院生だった大政さんはAMDAにインターンシップで訪れていた。震災が発生した11年3月11日「お手伝いできることはありませんか」とメールで尋ねると、東北行きを頼まれた。約1週間の活動で大政さんは被災地への思いを強くし、AMDAに就職。そのまま東北での復興支援事業の統括を任せられた。

大震災でAMDAは医療分野以外でも貢献した。大政さんが発案した「復興グルメF1大会」は昨年1月から7回開かれた。被災3県から出店者を募る食の催しで、「被災した地域同士でつながりを持てる」と支持を得ている。大政さんは「医療に関することしかするな」と言われていたらできなかった」と話す。「誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある」とは、AMDAの掲げる「人道援助の三原則」にある言葉だ。国連機関で働いた経験をもつ本部職員のニティアン・ビーラバグさん(46)はスリランカ出身、オーストラリア国籍は「国連での仕事はビジネスのようだった」と振り返る。手掛けた病院建設事業では現地の人と一緒に働いている実感が薄かったが、「AMDAの仕事は人の心を大切にしている」と感じるのだそうだ。

私自身、今年7月に岩手県陸前高田市であった「復興グルメF1大会」にボランティアとして参加し、会場設置などを手伝った。短時間でも被災者と一緒に働くことにより、「あなたにも、できることがある」とメッセージを受け取った気がした。

アジアの諸団体との関係をより深めようと、AMDAは7月、マレーシア・クアラルンプールに日本人職員が常駐する初の海外事務所を開設した。一方で成沢さんは「国際貢献とか大それたことは考えていない」と話し、学生ボランティアの受け入れなど足元も見つめる。「誰かの役に」というメッセージの連鎖で世界はもっと平和で豊かになるのでは。AMDAの活動にそんな期待を抱く人々が、この組織を30年も支え、これからも支えるのだろうか。

にした。災害や紛争の起きた地域へ医師や看護師からなる医療チームを派遣するなどしている。災害なら発生から原則72時間以内、「救える命があればどこへでも」を信念に、東ティモールの難民支援(1999年)やスマトラ沖大地震・インド洋大津波(04年)、ハイチ地震(10年)など約65カ国へ支援に入り、160を超すプログラムを手掛けた。紛争地では、対立する民族間に平等な医療サービスを提供することで融和の糸口を探るなど、平和構築にも尽力している。職員は十数人。医師は菅波さんしかおらず、派遣される医療チームは全国のボランティアや「海外支部」として協力している世界30カ国の医師

たちで成り立つ。菅波さんが79年、難民支援を志して医学生2人とカンボジアを訪れた際、受け皿がなく活動できなかった経験が原点。「受け皿がないなら作ればいい」と、翌80年からアジアの医学生が交流する国際会議を開き、地道に人脈を築いてきた。こうした素地に加え、協力態勢を維持し、活動を円滑に進められる背景にあるのが、対応の柔軟さと職員間や支援者らへの信頼感だ。

「人命救助」という最大の目的を達成できるなら手段にはこだわらない。昨年11月にフィリピン中部を襲った台風30号では、移動や輸送でフィリピン軍の協力を得た。通訳などでAMDAに協力する在日フィリピン人女性のサークルがあり、そのメンバーの親戚に軍関係者がいた縁だという。「軍」と聞いて驚く私に、成沢貴子AMDAL理事長(56)は「軍隊は災害地での活動のスペシャリスト。協力す



AMDAが東北支援の一環として開いた「第7回復興グルメF1大会」の岩手県陸前高田市で7月、五十嵐朋子撮影